

私がカワヨグリーンキャンプに参加した理由は、酪農体験や畑仕事などが出来て楽しそうだったからでした。そんな軽い気持ちで参加したカワヨでしたが、カワヨでの生活環境は同じ日本でも私が住んでいる環境と違うところが沢山ありました。

始めにカワヨグリーン牧場のある向山駅に着いて、その土地に降り立った時、周りに緑しかないのにとっても驚きました。見たことのないような昆虫や植物、キノコがたくさんあり、毎日が発見でした。

二日目の朝、私達の班は牛舎当番で四年生の先輩方三人と共に朝食前に牛舎へ向かいました。カワヨにいる牛達は放牧されていて、朝に牛の乳を搾るために牛達は一列に並んで放牧地から牛舎まで歩いて行きます。牛舎に入った牛達は二頭ずつ、機械を付けて乳を搾っていきます。中には、必ず一番始めに機械のある部屋に入りたがる子などいて、牛にも個性があるのだなと思いました。

この牧場で絞られた牛乳は低温殺菌され、私たちの朝食に出されました。こうして牛乳が飲めているのは、他でもない、牛乳を出してくれている牛達のおかげなのだと感じました。

その日のプログラムには鶏の解体もありました。そこには一羽の脚を縛られているニワトリが、テーブルの上に置かれていました。そのニワトリは、人がたくさん来るのに驚いているのか、私達のことをじっと見ていました。これから自分が殺されてしまうとも知らずに。鶏の解体をしてくださる川口さんの話が終わり、川口さんが解体の準備をしている時、不思議とこのニワトリがこれから殺されてしまうという実感がほとんどありませんでした。しかし、川口さんがニワトリに向かって「ごめんなさい。」と言って、包丁をニワトリに向けた時、急に涙が出てきました。このニワトリがあと数秒で殺されてしまうという実感が湧いたからでした。川口さんが包丁をニワトリの細い首に刺したと同時にニワトリは何とも言えない声で鳴き叫び、目を白黒させ、羽をバタつかせていました。ニワトリは首と体を離れた後も、羽をバタつかせていました。その間、私はただひたすら涙を流し、口に手を当てて呆然と立ちつくしていました。その後、首の無い体をお湯につけてから羽をむしる作業のするのですが、私にはできませんでした。羽をむしられ、羽が少なくなっていくにつれ、そのニワトリがいつも食べている鶏肉に変わっていくのが、とても辛かったです。

夕食時にその鶏肉がカレーとなって出され、口に入れた時、「ありがとう」という気持ちが湧き上がりました。食べ物に対して感謝の気持ちと共に言う「いただきます」という言葉を、今まで何も考えず言っていた自分をとても恥ずかしく思いました。食べるという行為は、他の命をいただくのだから、日本では食事の最初と最後に「いただきます」「ごちそうさま」というのだと思いました。とても考えさせられた鶏の解体のプログラムでした。

また、もう一つ考えさせられたプログラムに田んぼ体験があります。私達は、素足で田んぼの中へ入り、水中に生えている藻を取る作業をしました。私は、服に泥が付きながらも、必死に藻を取っていました。田んぼの中には、藻にくるまっていたカエルやドジョウがたくさんいました。田んぼがあることで人は食べ物を手に入れられ、生き物たちは生きる場所を手に入れられるのだと気付きました。

今回のカワヨでの経験は、私の中で一生忘れることのない体験になりました。食べ物や自然の大切さを改めて感じることの出来る四日間でした。

